

不登校生徒に対する援助効果の検討 (1)

研 攻 一 幼児教育科
黒 木 洋 子 メンタルサポーター

(2013年8月26日受理)

〔 要 約 〕

不登校生徒を再登校させるための、主にメンタルサポーターの立場からの援助効果を検討した。メンタルサポーターの職務は、不登校生徒の側に寄り添いながら、再登校へ向けての援助を行うことである。その結果、次のような結果が得られた。

- (1) 不登校生徒を再登校させることについては、学校と保護者間の中継点としての役割を果たし、効果が認められた。
- (2) 不登校を起こした、原因の根本的な治療的な側面である発達モデルに基づく解決については、その効果を果たすことができなかった。
- (3) 不登校生徒の不登校の原因と見られる、家庭内の家族関係の問題についての情報収集などについては、十分な効果を得ることができなかった。

I. 問題

いじめによる中学生の自殺や教師による体罰問題などがマスコミでも大きく取り上げられ^{1)~3)}、教育問題の根の深さを痛感せざるを得ない昨今であるが、こうした教育問題の1つに不登校の問題がある。児童生徒の不登校をどのようになくすか、またどのように再登校を可能にさせるかというのは、教育に関わるものとして考えなければならない問題である。この問題解決には、例えば一人の担当が対応するには荷は重く、各専門家や責任を負った人たちを含めた集団で対応することが必要になってくる。

こうした不登校の原因分析と、それを基にした解決策を立てて、それを実行していくことが必要である。実行していく過程で得られる新たな情報によって、その解決策の修正を行っていくことも重要なことである。

本研究は、こうした不登校生徒に対する再登校への援助効果を検討することを目的にしている。しかし筆者の一人は、解決する際の援助方針の決定に、情報提供以外は関与できない立場であるものの、不登校生徒の側に寄り添いながら、再登校を目指す生徒をサポートする役割を担っている。不登校生徒に関わる具体的な情報を得た上で、それをもとに保護者や学校側との調整や、適応教室への入級アドバイスや調整を行うことが役割である。

しかし、どのような役割や立場であれ、こうした不登校生徒の問題の原因分析をし、解決のためのプロセ

スを検討しておくことは、不登校生徒に寄り添いながら再登校を促ように働きかける際に、解決方向に即した無意識の援助活動を行える可能性がある。

そこで、(1)全国の中学校の不登校の状況 (2)P市の教育プランと不登校生徒への対応 (3)メンタルサポーター(以下MS)の役割と環境及び操作要因についてまず述べることとする。

(1) 中学の不登校の状況

平成24年度の「子ども・若者白書」によると、「平成22年度における中学校の不登校生徒数は、9万7428人である。小中学校を合わせた不登校児童生徒数は、前年より約3千人減少している。全生徒数に占める不登校生徒数の割合は、中学校2.7%である。また、不登校児童生徒が在籍する学校数は、小中学校合わせて1万8815校、小中学校の総数に占める割合は、57.3%となっている。また、不登校になったきっかけと考えられる状況では、『不安など情緒的混乱』が23.4%、『無気力』が21.6%、『いじめを除く友人関係をめぐる問題』が15.2%となっている。ところで、中学校に限定して見ると、学校に係る状況では、『学業の不振』が8.7%、『クラブ活動、部活動等への不適応』が2.3%、『教職員との関係をめぐる問題』が1.6%となっている。また、家庭に係る状況では、『親子関係をめぐる問題』が8.7%、『家庭内不和』が3.7%となっている。』⁴⁾と述べられている。

これらは、統計の処理上複数回答を含めていることから、ある生徒が不登校になるきっかけは単一なものではなく、いくつかの状況や原因が複雑に係りあっていると考えることが必要であろう。

(2) P市の教育プランと不登校生徒への対応

P市のインターネットに公開されている「教育アクションプラン2012」(平成24年度教育実行計画)によると、4つの基本的方向の1つに「基本方向2『生きる力』の育成」があり、その中の「特別な支援や配慮を要する子どもへの教育を推進する」カテゴリの中に、「不登校の子どもたちの教育機会についての支援の充実」として、①適応教室「A教室」、自立支援教室「B教室」、小集団体験活動事業「C」を継続して実施する②不登校生への支援として、全中学校にMSを継続して配置すると記載されている。そのプランの脚注に、「MSとは、不登校生徒の再登校や未然防止に向けて、教師以外の見地から支援を行うことを目的に、市内全中学校に配置している不登校補助員のこと」とある。

P市では、また、不登校支援3点セットというものがあり、「教育相談センターでは、校内研修などで不登校について考え、解決を目指して取り組む際に参考にさせていただけるものとして『不登校支援3点セット』を作成しました。各学校で不登校の未然防止、動き出し支援、早期復帰に向けて活用していただきたいと思えます」とあり、①アクティブプラン編(考える)では「P市の不登校対策実践計画を『P市アクティブプラン2011』としてリニューアルしました。校内研修用として、研修会の進め方の例やワークシートも入れています。」とある。②データ編(知る)では、「全国・県・市等の不登校数や不登校率、不登校が始まった学年、原因別欠席者数及びその割合等、不登校に関するデータを集めました。各校のデータを作成したり原因分析をしたりするときに役立ちます。」とある。

③実践資料編(使う)では、「各校の実態や特徴が分析できれば、次は実践です。実践資料編では、チェックシートや個別支援票、ダイヤグラム、小中連携シートを入れました。中学校区連携ユニット12で活用していただきたいシートも入れています。」とある。また不登校支援3点セットの特徴として、「『この3点セットを使えば不登校はなくなる』というような魔法のグッズではありません。不登校の解決に向け一生懸命取り組んでおられる先生に、少しの支援ができればと思って作成したものです。」とマニュアル的な使用を注意するように記載されている。

上述①の「P市アクティブプラン2011」をみると、重点目標として、①「中学校区連携ユニット12」を活

用した不登校対策の推進 ②欠席の長期化を防ぐ早期対応の推進 ③再登校に向けてのチーム支援(見立てと役割分担の充実)が挙げられている。

また「子どもの学校適応を支援する対応」として、すべての子どもに対しては、「良質な人間関係の環境作り」を、一部の子どもに対しては「予防的不登校対策」を、特定の子どもに対しては、「不登校支援(教育相談)」を挙げている。

また「熱が出ても行きたい」と思う学校にするために、「ユニット12を活用した『なめらかな進学・進級』、『仲間づくり』、『お役立ち体験』を設定し、「だいじょうぶかな」と気になる子どものために、「『アセス』などのアンケートや『チェックリスト』を活用した実態調査と支援」、「1ヵ月あたり欠席3日の家庭訪問の徹底 ⇒『休ませない』のではなく、『休まなくてすむ』対応」を考えている。また、「今日もまた…」欠席が続いている子どものために、「メンバーにスクールカウンセラー(以下SC)を加えたチームで見立てと方針」、「個別支援シートの活用」をするように配慮されている。

また、不登校になったときの支援体制として、適応教室「A教室」では、毎週月曜日から金曜日で、午前9時から午後3時(月、水、金)、午前9時から12時(火、木)が開催時間となっている。活動内容は、・午前中が自主学習 ・午後が体験活動(軽スポーツ・園芸・文化活動など) ・カウンセリングと相談 ・スクーリングなどとなっている。また、相談から学校復帰までの過程として、「①学校(担任)に相談します。②教育相談センターに相談の申し込みをします。③保護者、本人と面談し、本人の状態、保護者の考えをお聞きします。④学校、教育相談センターがケース会議を持ち、指導の方向性を決定します。」としている。

また、指導の方向として、「子どもさんの状態により、いろいろな方向からの指導の方向を考えます。」として、①適応A教室に通う ②適応A教室と学校の別室を使用する ③学校の別室で指導を受ける ④教育相談センターに通う ⑤他機関を利用する が挙げられている。また、「①適応A教室で学校復帰を目指す と決定したら、必要書類の提出をします ②体験入級を経て、正式に入級します ③適応A教室に通いながら、担任の先生やMSと関係を保ちます ④スクーリングや放課後登校等を経て、学校復帰を目指します。」と挙げられている。また保護者の方へとして、「A教室は、学校復帰を支援する教室です。そのためには、必要な指導も行います。その際には、保護者の方のご協力もあわせてお願いします。」と呼びかけている。

このように、P市の不登校対策としての組織的な対応はきめ細かく行われていて、不登校生徒を、再登校させるためのシステムティックな組織作りが行われていることが見て取れる。

(3) メンタルサポーター (MS) の役割と環境及び操作要因について

MSは、不登校生徒の再登校に向けての援助活動のなかでも、補助的な役割をすることになっている。P市には12中学校があり、各中学校に1名ずつ配属され、1年契約で午前8時15分から午後5時まで、他の教職員同様に常勤することになっている。

MSの役割は、不登校生徒の再登校に向けた生徒に寄り添うことが仕事であり、その最終目標は、不登校状態から再登校がなされるまでが役割となっている。家庭訪問や別室登校してくる生徒や適応教室に行く生徒のスケジュールの調整や付き添いなども行っている。

この中学校には週1回の割合でSCが来るようになっている。SCは心理的問題を抱えている生徒にカウンセリングするのであるが、その心理的問題の意識化やその解消などを目指す治療的側面が中心である可能性が多いのではなかろうか。問題を引き起こしている原因の解明や働きかけについて、深く立ち入ることはSCの領域を超えてしまう可能性もある。週1回の訪問では、家庭や学校との軋轢があった場合に即応することは、難しいのではないかとと思われる。

こうしたカウンセラーのジレンマについて、杉村は⁵⁾ 教育と治療の関係について、「教育と治療について一般的に言われていることですが、我々は現場でしっかりと教育モデルに関わるのが大事だと思います。我々は心理モデルをベースにしながら、教育現場に足をかけながら関係を持っていく必要があるということをお願いしたいわけです。」と述べ、カウンセラーのコンセプト・チェンジとして7つ挙げ、「治療構造と治療方針の見直しです。つまり我々は学校現場へでかけて行っております。それも週に2回とか1回とか月に1回とかで、短期に勝負しなければなりません。長期の心理療法というのは非常に難しくなってくる場合があります。従いまして、短期間のブリーフセラピー等も取り入れていかなければならないということです。」と述べている。

また住本⁶⁾によれば、「かつてSCは、『治療モデル』を導入すべきか『発達モデル』を導入すべきか、が問題になったことがある」という。「不登校にはさまざまな種類がある。従来は神経症的不登校生は、早く登校したいと思っているので、相談内容が成り立つ。このような対象こそが、臨床心理士のもっとも得意とす

る分野であり、環境さえそろえば『治療モデル』が導入できる。ところが最近、急増している低学力・非社会性・無意欲・無気力などの不登校生には、カウンセリングが成り立ちにくい。母親もパートで忙しく、休んでばかりおれない。従って、彼らにはカウンセリングルームや適応教室の中で、性格・態度・学習等の未解決な発達課題を、じっくり時間をかけて達成してもらうしかない。その意味で彼らには、『発達モデル』の適応が望まれる。」と述べている。また「筆者が今、もっとも力を入れているのは、不登校傾向の生徒をできるだけ早く見つけ、早期に治療・指導する方法の開発である。(1)無気力化 (2)心配性 (3)存在感の希薄化 (4)友人・教師関係の希薄化 (5)身体化反応等から総合的に、不登校傾向の生徒を探し出し、事前指導する方法である。これなどは、臨床で得た情報を学級経営にどう生かすかということであって、臨床と教育の融合である。」と述べている。このように、不登校の問題は、「治療モデル」でなく「発達モデル」で対応する必要性を述べている。このことは、不登校生徒が自分の置かれている環境と相互作用をしながら、自分の人生の中で直面する発達課題を解決しながら、心理的に成長・発達をしていかなければならない側面があることを意味している。筆者自身は、「発達モデル」の視点は重要であると考えているが、その当該生徒の成長するスパンを念頭においた長期的な展望と、在学中という時間的制限内での対応の2本立てで、指導方針を立てることが必要ではないかと考える。

ところで、筆者の一人はMSの立場で、不登校生徒に関わりを持っている。学校側の責任者が中心(SCを含む)となるケース会議などで指導方針が立てられるが、MSはその決定に対して情報提供はできるものの、決定についてはその権限がない。その点で、指導方針は操作できないので環境要因ということができる。しかし、不登校生徒に寄り添いながら、その悩みや日々の苦悩を読み取り、円滑なコミュニケーションを取りながら、日々の問題の解決をしなければならない立場であり、こうした側面では操作可能となり操作要因と考えることができる。MSが指導方針についての理解と、不登校生徒からの情報を踏まえて、その都度適切に対応しなければならないという点では、かなり重要な役割を果たすことになる。

(4) 問題の所在

不登校生徒の不登校の原因を考えると、学校内でのいくつかの条件や原因は言うに及ばず、その生徒がそれまで育ってきたあり方、特に家庭教育の問題も大きな原因になりうる。というのは、学校環境はどの生

徒に対しても、同様な刺激環境が提供されていると考えられるからである。その学校環境での軋轢には、友だちや教師との関係、教授を含む学習環境などが考えられるが、そうした軋轢を引き起こす生徒の認識や学力レベルは、小さい時から蓄積されたものの集大成であり、こうした価値観の体系が、友達や教師との関係を左右する可能性がある。こうした価値観に影響を与えるのは、家庭教育が大きく影響していると考えられることは、それほど不当な考え方とはいえないだろう。

こうした視点で不登校生徒の問題に対応するとき、上述のように、P市の不登校対策を見ても、不登校を再登校に導くことが学校側の目標設定になるのは仕方がないとしても、「発達モデル」で考えた時、不登校生徒が抱えている問題を意識化させ、家庭での問題も分析して、生徒が直面する発達課題を解決して成長・発達していく際の援助を行っていくことが、本来必要なのではないかと思われる。中学校を不登校している間に、生徒は学校や親たちとのやりとりや葛藤を通して、自分のあり方（自己の存在）を内省的に思考（自分を見つめる）できる可能性もあるだろう。

本研究では、不登校生徒の再登校という第一目標ばかりでなく、「発達モデル」としての生徒の内面の成長・発達の側面での援助が行われたかどうかについて、具体的な事例を対象に検討することにする。

II. ある不登校生徒の事例の検討

本事例の不登校生徒T（男子）に対して、MSにより得られた情報は次の通りである。Ⅲの不登校予測までの資料内容は、主に3年生1学期までのものである。

(1) 中学3年男子Tについて

3年男子Tは、入学当初は学業、スポーツにおいて積極的に頑張る子だった。体格もよく、バスケットボール部に入部し活躍するが、2年の2学期の終わり頃、バスケットボール部の顧問の先生の指導に落ち込み、部活動をやめてしまう。しばらくは普通に学校生活を送っていたが、「学校に行きたくない……」と口にするようになり、数日休んでしまう。

学校を休んでいる間にテントを持って家出し、一晚野宿したり一日家出のようなことをくり返す。その後、欠席をくり返し登校できなくなった。

3年生になり担任とMSが定期的に家庭訪問する。両親は登校できないTを悲観し、家族もストレスが溜まる。親子ゲンカや家庭内暴力もみられた。一日中パソコンゲームにのめり込む日々。気が向くと外に散歩に出たりして外出はできた。

(2) 家族構成

・父（高校教諭）・母（保育士）・姉（高校2年生）・T本人（中学3年生）・妹（小学5年生）・弟（4歳：先天性知的障がい児）の6人家族である。なお、祖父母は近所に住んでいる。

(3) 生育歴

体格もよく、小学校のクラスでは大人びた性格で少し傲慢なタイプ。人気があるという訳ではないが、学業もスポーツもよくでき一目置かれる存在。時により気に入らないことがあると相手（友だち）をののしったり、トイレに連れ込み胸ぐらを掴むなど攻撃的な態度もみられた。

家庭では、父親は厳しく、仕事から帰宅するなり宿題のチェックや手伝いを強制した。テレビや家財道具を自分勝手に扱うと「これはお父さんのお金で買ったもの！！」と勝手に使うことが許されずルール化されている（使用時間を決められるなど……）ことが多かった。

母親は、愛情を持って関わるもテストの高成績や手伝いの度にお小遣いやほうびをあげていた。現在のTの「見返りを求める態度」は、そのせいではないかと後悔している。

Tが小学5年生の時に弟が生まれるが障がいがあることで育児に忙しいようである。姉、T、妹が協力して弟の面倒を見ているが家事は全般的に母がこなし、姉、T、妹たちは自分の身の周りのこと程度の手伝いをするが積極的でない。弟が保育園に通うことになり、母親は週3回のパートに出ている。姉や妹は元気に登校している。

(4) 学校での経過

中学入学時は少し傲慢なタイプとして見られていた。積極性もあり級長に選ばれる。しかし次第に頑張っても自分以上の高成績者がいることや友だちの入賞・入選する姿に劣等感を覚え始める。元々自分本位で友だちをののしったりしたことがあったので、深い友だち関係は作れず、分かり合える友だちは存在しない。2年生になり、やる気と積極性が減り学校生活が辛く思えるようになる。部活動も休みがちになり退部。各先生の指導はしっかり聞かすが、裏では先生を馬鹿にしたり信頼はない。学校を休むようになってからは、友だちとのつながりもなく先生が訪問すると「学校のにおいがする……」と言って面会を拒否する。別室登校が出来るようになってからは職員室まで担任を訪ねることも可能になったが極度に緊張するという。

表面的には普通に会話したり、笑顔を見せたり元気

に見えるが、「明日も学校に来る！」と言いながら、次の日休んでしまうこともあり、心理的の改善には時間がかかるように思われる。別室登校での様子は、集中力に欠け、自主学習にもやる気がみられないことで低学年の子どものように動き回ったり、私語が止まらなくなるほどにハイテンションになるところが気になる。進路に向けては、積極的になれず親の意見を仕方なく聞いている。将来の夢も今のところはない様子。

(5) 本事例でのMSの働きかけと職務内容の概略（3年生4月～）

① Tや保護者への働きかけた内容（4月～8月）

(a) T本人への働きかけ

定期的な家庭訪問を通して、以下の目的を達するようにした。

- ・ Tの思いを聞いたり、不安を取り除く。声掛けをくり返すことにより信頼関係を作る。
- ・ Tの思考や生活のパターンと一緒に見直していく。
- ・ 学校とのつながりを感じてもらう（以上、保護者にとっても全く同じ）

(b) 保護者への働きかけ

- ・ 両親の話聞き、両親の不安を軽減していく。
- ・ 保護者と学校のパイプ役となり連携していく。（一緒に考える）

② 別室登校時などでのTへの働きかけ等（主に9月以降）

- ・ 本人の負担や抵抗をなくしていく配慮が必要であるため、家庭での生活の様子を聞いたり、両親の思いを聞きながらTの過ごしやすい環境づくりを考えていく。
- ・ 自分の行きたい高校を見つけ、受験に取り組んでいけるようサポートしていく。
- ・ 学校復帰ばかりを目標とせず、希望や夢を持って進んでいけるように寄り添っていく。
- ・ 自分のペースで自己学習をしている環境を整えると共に、Tとの会話時間を十分に作る。
- ・ しっかりTの置かれている状況を認めさせ、それをしっかり受容し自尊心を高める働きかけをする。
- ・ クラス通級（授業）へのサポート（タイミングを計ったり、移動に付き添うなど）

③ その他の関連業務

- ・ 適応A教室職員、心理士との連携
- ・ SCや養護の先生とのケース会議
- ・ 担任の先生方とのケース会議
- ・ 自宅への送迎など
- ・ SCや学校以外の機関につなげる。（適応A教室やカウンセリングを勧めるなど）

以上の目的と業務内容によって、学校と保護者間、Tの心情把握とそのサポートを行ってきた。

(6) MSの8月までの働きかけに対する効果

- ① MSとして、4月当初は家庭訪問に対し『何しに来るの?』『ムリ』『耐えられない』と母親に断るよう言っていたが、ほぼ毎日訪問を続けると次第に本音を言ったり、学校の情報を聞いたり関係が出来上がってきた。
- ② 4～8月は不登校だったが5月の修学旅行には行くことができた。
- ③ MSが関わることでTが変化したことは、家族以外で唯一話し相手になれたこと、初めは一方的に話し掛けると返事をするのがやっとだったのが『あのね～』とTから話し掛けてくるようになった。家庭訪問も抑うつ状態がひどい時以外は、必ず玄関に顔を出すようになった。
- ④ 別室登校時間は決まっていなかった。昼夜逆転がすすんでいたため、時間割に合わせる必要がある事以外は昼前登校が多かった。出席日数はもう資料がないので分からないが、学校へは数える程しか来ていなかった。

以上の様に、Tの不登校は改善されておらず、修学旅行には参加したものの、学校には行けない状況が続いていた。MSが毎日家庭訪問して、最初は拒絶する段階から、心の内を少し話しだそうとする段階になってきたことが読み取れる。このように、MSに対するTの心理的な変化を読み取ることができる。

(7) 学校の8月までの状況を踏まえた基本的指導経過

- ① Tに対するSCの利用はなかったが、相談センター（市教委）の心理士との面接を受けた。
- ② 適応A教室へのインテーク会議は平成24年9月4日に行われ、学校からは校長、学年主任、担任が、保護者、T本人、適応A教室から指導主事、心理士、相談員が出席した。その結果、火・水・木曜日は適応A教室、月・金曜日は学校の約束となる。
- ③ 指導方針は学年で話し合ったが、なかなか学校に登校できなかったため、学校と家庭と相談センターとの情報交換をもとに、本人と関わりを持つことが主となった。
- ④ SCからアドバイスをその都度MSが貰う。母親が感情をMSにぶつけてくることもあったので、SCはMSのメンタルヘルスも担ってくれた。

Ⅲ. 得られた情報からのTの不登校原因の予測

(1) 父親の人格など

かなりの権威主義的な人格（パーソナリティ）の持ち主であり、家族に対して自分の考え方を強要するところがある。しかし権威主義的人格（パーソナリティ）というのは、勤め先での上司たちに対しては下手に出るという行動も見せることも多く、その実態はどのようなものであるか知りたいところである。また母親はこうした父親の人格（パーソナリティ）を否定したり、批判したりすることはできずに従っているのではないかと思われる。父親のこうした人格は、高校の教師という社会的にも知的面でも学歴面でも高いと予想されることから、自分の子どもたちへも自分と同じような特徴を持たせたいと願望し、またこうした家庭教育を行おうとしていると推定できる。また、子供の宿題チェックや手伝いを強要するなどの側面からすると、かなり神経が細かく、自分の思想（考え方）に自信がある、または固執する傾向があるように思われる。その背後には、自分の子どもたち、特に長男であるTに対して、父親からみた立派な子どもに育てたいという願望と強要があるのではないかと思われる。

(2) 母親の人格など

基本的に母親は父親の考え方に従っていると考えられる。この家庭構成からすると、父親が全てを決定する役割を果たし、それに従い、子どもたちにそうさせるようにすることが母親の役割であり、父親に対する子どもたちの壁になることはないのではないかと思われる。これまでの資料からは、夫婦関係が、対等の関係というよりは、父親が上位、母親が従う夫婦関係のように推定される。

(3) 姉について

姉の性格や特徴などは書かれていないので判定できないが、このケースでは姉がどのように育てられているのか知りたいところである。というのは、この父親が、子供全体を同じように期待して育てようとしているか、それとも男性と女性の育て方を違って育てたいと考えているのか等を知りたいからである。

また、姉が、父親や母親に対して、どのように見ているかについても知りたいところである。直接本人に聞くことはできないが、Tからの情報として知れば、より問題がはつきりするのではないだろうか。

(4) 4歳の弟について

知的障がい児の弟についての姉やTの感じ方や世話の仕方と、父親と母親の接し方と考え方について知り

たい。というのは、父親にとって、以上の推論からすると、4歳児の弟は非常に苦しい存在である可能性があり、また母親からすると、父親に対する引け目の原因である可能性もある。この家族において、この弟への考え方や接し方がわかれば、家族関係について、より理解しやすくなると思われるからである。

(5) Tの行動について

Tの行動は、小さい時からこうした家庭教育を受けてきて、父親たちの期待する人間になる路線に沿った人格（パーソナリティ）や能力を身につけるように育てられている。Tのこうした特徴は、基本的に父親と同じ権威主義的人格（パーソナリティ）の要素が見られる。友だちを下にみること、友だちと対等には接しないこと、運動や勉強でも優秀であると自己規定してきたことなどから、そうした特性は父親の価値観を体現してきたことの結果だと思われる。（ここまでは父親にとってよい子だった）

ところが、学年が進むにつれて、こうした自己規定が崩れてくることを経験するようになってきたのではないか。友だちの中に自分より高成績のものが出てきたり、入賞・入選する友だちも出てきて、Tの価値観が揺らぎだしてきたのである。加えて、自分では正しいと考えているバスケのやり方に顧問の指導が入り、Tの考え方を否定される等を経験したことから、ここでも自分に対する自信が揺らいできたようである。普通の生徒であれば顧問の指導を受け入れ、自分がそれに合わせていくのが一般的であるのに、Tの自己への信頼と自信が、結局は退部という行動をとらせている。これらからすると、Tの自己に対する自信や評価は、相当高かったのではないかと思われる。

今のTの行動は、ある意味で自我（自分という意識）の不安定期間に遭遇していると考えられる。父親の要求するような人格の形成過程が、周りの状況からするとそのまま上手くいかないこと、新たな自我の確立をどうしていくかという問題に直面しているのである。いつかは破綻することが予想されるものであり、それが今の時期に当たっているに過ぎないのではないか。簡単にいうと、Tが意識しているかどうかは別として、大人になるために苦悶する時期と言えないだろうか。Tが今悩んでいることは、父親の価値観や権威主義的人格からどう離れ、自分なりの自我（自分らしさや考え方）をどう構築していくかという発達課題に直面しているのではないか。そうだとすると、この方向性は、他人からちょっと助言すれば解決できる問題ではなく、自分の中で解決していかなければならない問題である。彼はそれを自分でやり遂げなければならない。親のこ

うした呪縛から解放されることが期待されているのではないか。

Tが置かれている状況について、Tばかりでなく親たちも認識していないことから、多少の時間はかかるかもしれない。ただ、筆者自身の息子の不登校の経験からすると、不登校や適応教室に行っている間も、何かを学んでいるということである。不登校がただただマイナスのものでなく、自分と対峙して、内面を深める場面になることも多い。Tが本当に賢い子であれば、こうした場面で何かしら学ぶことはあるのではないかとと思われる。

まとめて言えば、Tが親の呪縛から自分の存在を開放し、自分を見つめる機会が到来しているのが今だと考えることが必要ではないか。その意味で、いつかはこうなるはずだった時期が到来したに過ぎないのである。

以上のような予測から、父親の描いている理想像にT自身が沿うように振る舞い、考えてきたことが破綻をきたしてきたことが第一の原因であり、それを解決できないままに、学校での小さな適応が難しくなったことが重なって、不登校に至ったのではないかと考えられる。両親がこうした不登校になった原因を意識していないために、その責任を学校側に負わせている。こうした根源的な原因を乗り越えるように、学校側が援助できるかどうか、拙速な解決ではなく長期的な展望をもって対応する必要があると考えられる。

IV. 検討の視点

- (1) 再登校については、学校の指導方針、P市の不登校対策、卒業式までが短いことから可能になるのではないだろうか。
- (2) この1年半の経過から、この問題についての家庭教育の変更、父親や母親のこの問題への認識の変化が見られないことから、「発達モデル」に沿うようなTの行動や心理的な変化は余り起こらないのではないか。

V. 予測後の経過

(1) 2学期

9月から市内の適応教室の通級が始まる。インテーク会議にて、月・金曜は学校（母親が仕事で送迎できないため）火・水・木曜は適応教室（母親の送迎）の約束で受け入れ開始。

9/7（金）

登校できず。家庭訪問し母親と面談（2.5H）「月・金の学校、火・水・木の適応教室はあの子にとって、

ハードルが高すぎる！学校がハードルを上げるせいで登校ができないのでは！？」と感情的になり大泣きする。

9/10（月）

迎えに行くが出来て来ない。登校を渋っていると判断する。

9/11（火）母親よりTEL

前日Tが登校しなかったのを知り、「Tが登校できなかったのは、MSが気まぐれに迎えに来るからだ。」と言って、迎えの時間を決めるように要望してくる。迎えの時間を決めても、Tは登校意欲を見せず。担任もMSもTの思いと母親の思いのジレンマに苦しむ。

9月～10月

次第に適応教室にも慣れ、友だちもできる。月・金の登校はできない。適応教室の友だちとの関わりをきっかけに、登校に対する意識も高まっている。だんだん適応A教室が居場所になりつつあり、適応A教室の通級が可能なら無理に誘うことをせず、別室登校を強要しないで「つながり」を持つための家庭訪問を続ける。

その後、別室登校と適応A教室に通うことができるようになったが、心の状態に好転はなく先生や友だちの前では虚勢を張っている様子。10月の校内合唱コンクールの練習に一回だけ教室に入りクラスのみなどと過ごす。以後は登校の意欲も高まらず適応A教室も欠席をくり返している。「学校にいる自分は、もう1人の自分のようだ……」と本人は語る。

また母親は市内の教育相談センター（適応教室もその中の施設）の心理士と定期的に面接する。心理士の話を受け、不安になると学校に訴えてくるが増える。

私立高校（不登校枠）の学校説明会に参加する。夏休み頃からTは母親の横に寝るなど退行現象が見られるようになる。

10/29（月）

母親は「Tは理想の自分と現実の自分のギャップが大きい。理想の自分で頑張りすぎるところがあるので、プレッシャーを与えないでほしい。」「Tが登校できないのは学校が厳しすぎるから！」と泣きながら話す。

10/31（水）～11/3（土）

相談センター主催の集団体験活動に適応教室の仲間と参加する。パーベキューや乗馬などの野外活動を楽しむ。元々、よく気がつき行動的なので皆の人気者になるが、参加後は気持ちが落ち込み、再び家にこもりがちになる。

11/12（月）

家庭訪問。寝起き、髪ボサボサ。元気がない。

11/16 (金)

祖父とハウレンソウを植えると言い、家の前の畑を耕していた。久々の活動的な姿だった。

11/29 (木)

期末テストのため登校。あとの2日間は欠席。

12月 (週2～3回家庭訪問)

家庭訪問をすると、寝ていることが多く、髪や身だしなみもルーズになる。MSの質問に対しても「さあ～」などと会話も鬱陶しい様子。

父親とは相変わらず関わりがなく、父親はTから逃げている。一方で、Tはイライラを父親にぶつけることが増え、父親のちょっとした行動にも腹を立ててしまう。

12/12 (水)

母親よりTEL。

12/13 (木)

母親よりTEL。Tは殻に閉じこもり勝ち。母は「Tは学校に行く習慣をつけないと、高校にも通えない」と焦る。Tにもその不安をぶつける。家でごろごろしているのを見るのが耐えられない様子。

12月末～

昼夜逆転が進む。覇気なし。

(2) 3学期

1/8 (火)～

適応教室へも行かなくなる。昼に起き、昼過ぎからPCをする毎日。家族との話はなし。

1/15 (火)

私立高校入試の願書を書くため登校。迎えに行くと、着替えの途中だった。進学する気持ちがあるのだと少し安心する。

1/23 (水) 母親よりTEL。

「おかあさん、はよ帰ろ……」が口癖になる ⇒ 退行現象が見られる。SCに相談。「母親だけに出すサインかもしれない……。母親との関係が築けなかったものを取り戻そうとしているのかもしれない。退行は今のうちだからいいのだ。」これを聞き、母親も納得する。

1/29 (火)～1/31 (木)

入試面接練習と事前指導のため3日間連続して登校する。

2/8 (金)

入試事前指導のため登校。

2/9 (土)～10 (日)

私立高校入試日 ⇒ 夜MSに「無事終わった……」とメールが届く。

2/12 (火)

私立高校合格の通知を受け取る。2月の適応教室の通級日数は1日のみ。この頃、母親の女性特有の病気が分かる。

3/1 (金)

3年生を送る会に参加。体育館2Fから他の別室生と楽しそうに見学。終了後、別室の3年生に向け、来週からの卒業式練習参加について話をする。母親、手術のため入院。

3/4 (月)

登校。クラスの仲間と一緒に式練習に参加する。ふっきれた感じ。クラス復帰のきっかけをつかんだ様子。

3/5 (火)

適応A教室の卒業生を送る会に出席する。父も同席する。

3/6 (水)

登校。長時間体育館で式練習。整列や返事の声もしっかりしている。2年男子に嫌がらせを受け、職員で対応する。

3/7 (木)

登校。担任や友だちの呼びかけで教室に入る。

3/8 (金)

登校。卒業式予行。その後は教室で過ごす。

3/11 (月)

登校。朝から教室に入る。夜、MSにお別れとお礼のメールが届く。

3/12 (火)

卒業式。

(3) MSの感想とまとめ

① 2学期以降、Tは「何とかして立ち上がりたい……！」と心の中で叫びながらも、どうしようもない苦しい時期を過ごした。半ば、引きこもりの日々を送り、情けない自分に落ち込む一方で、母親は焦り苛立ちを増し、その原因を学校側であるとしながらも、その解決を学校に頼る傾向があった。母親はTの行動が思い通りにいかないとヒステリックになり、感情的になる電話が連日続いた。

② 父親は相変わらず厳格で、Tの問題から逃げているようだったが、母親が入院、手術という事態が起ることで、少しずつTとのかかわりが増えた。

③ Tは、母親が入院で不在した時期と卒業が重なる。卒業式に向け、MSが「式練習には気まぐれに参加するのではなく、最初から参加し、誠意を見せよう！」と話すと、それに応え、式練習初日から、1週間休むことなく登校し、皆と過ごした。

④ Tが再登校を可能にした要因は、卒業までの登校日

数が明確で気持ちが楽になれたこと、立ち上がるきっかけをつかみ達成感を得たこと、登校により生活リズムが整ってきたこと、入院中の母親に対する思い、学校の繋がりや信頼、等が考えられる。

- ⑤学校の立場として、Tと一番長く深く関わったのがMSの筆者だったが、Tが引きこもりの時期にも欠かさず、家庭訪問を続けた。学校との繋がりを感じてもらうため、学校の様子やクラスの出来事を伝え、進路への意識を高めてもらうために、将来の夢や不登校で苦しみながらも進学した先輩たちの話をした。
- ⑥2学期後半から、学校、適応A教室共に、ほとんど登校できなかったが、筆者が訪ねると、いつも玄関先に顔を出した。覇気はなく返事をするのがやっとだったのが、いつしか自ら話しかけてくるようになった。また、「学校のにおいがする。」と言って拒否し続けた担任に対しても、卒業式前の教室の入る際「〇〇先生がいてくれるから大丈夫！」と信頼を寄せる様子に、Tの教室復帰を確信した。
- ⑦卒業式前夜、Tから「苦しい時期、ずっと支えてくれてありがとう……、新しい居場所が見つかりました…」と感謝を伝えるメールが届いた。訪問時の「こんにちは」の言葉や体育館に入るタイミングを考えてもらったことが有難かった……という内容だった。
- ⑧卒業式当日、Tは晴れやかにクラスの皆と旅立った。仲間と過ごす時間を取り戻すかのように肩を寄せ合い、何度も涙をぬぐう姿が印象的だった。

VI. 検討の視点について

(1) 視点1の「再登校に対する援助効果について」

- ①予測後の経過で、3月になって卒業式が迫っていたことが、Tの再登校を可能にさせた大きな要因となった。MSによれば、それを機会にして卒業までの登校日数が明確で気持ちが楽になれたこと、それを立ち上がるきっかけにして達成感を得られたこと、登校により生活リズムが整ってきたこと、入院中の母親に対する思いが自分を突き動かしたこと、学校との繋がりや信頼を取り戻せるようになった等が、好循環を形作るようになったことである。
- ②2学期までの適応A教室やMSの恒常的な働きかけが、昼夜逆転があったとしてもスムーズに再登校できた心理的要因の1つになっている可能性があった。こうした日常生活の中で、T本人の中に学校に行かなければという気持ちと、行けない気持ちの葛藤があったと考えられ、そうした卒業式が迫ってきたことを契機にして、再登校できるようになったと考えられる。

(2) 視点2の「『発達モデル』から見たTの心理的成長について」

- ①家庭環境、特に父親とTの関係を含む親子関係については、基本的には大きな変化は見られなかった。Tが不登校になってから、母親は不登校の原因を学校側にあるとし、その学校側の対応に不満を発している。しかもそれを心理的に処理できずに、MSなどに八つ当たりしている状態が続いた。こうした一貫性を欠いた母親の言動や感情的な反応は、途中で入院や手術があったけれども、基本的に卒業式まで変わらなかった。父親とTとの媒介者としての母親が、このように基本的な行動が変化していないことが、この家庭での人間関係が変化しない要因にもなっていた。
- ②父親とTとの関係は、母親の「女性特有の死ぬかもしれない病気」の入院・手術が必要となったことを契機にして、多少の改善は見られた。そして父親のTへの態度が上から下に対する態度から、下から上とも言える逃避的行動をとるように変化してきている。この変化は、Tが父親に対して攻撃的行動をとるようになってきたことによるものだと考えられる。その意味で、Tと父親の位置関係が揺らぎ始めている可能性がある。こうした父親とTの人間関係の変化から、Tの心理的な変化の兆しをみてとることができる。というのは、父親の理想像に従属しそれを実現しようと努力してきて挫折したTにおいて、父親への攻撃的行動は、父親と自分を対等に向き合えることができる、またはそうなる可能性を感じさせるものである。また2人の関係を見つめるもう1人のTという存在の構図の可能性を感じさせるものである。その意味で「発達モデル」からみると、Tの不登校が自分を見つめることの端緒になった可能性がある。しかし、解決すべき発達課題をT本人が意識しているかと言えば、それはまだないと考えなければならぬ。
- ③時間が経てば、家庭内の人間関係は変化していくのであるが、Tと父親の媒介者である母親は、そのTの不登校の原因や学校側の対応のまずさを、自分の家庭ではなく学校側に責任転嫁する傾向が見られ、それにTも父親も引きずられている。家族の中心であるこの3名が、家庭の在り方にも原因があるのではないかという認識を欠いており、Tの「発達モデル」に対応する心理的な変化を押し止めているのではないか。こうしたTが父親の理想像から離れて、自分らしい人間像を形成するには、これから数年の時間が必要になるのではないかと危惧する。家庭での父親や母親が、Tの人間としての発達課題を解決

し成長していく心理的発達を妨げていることを認識させる手立ても、今後必要になるのではないだろうか。この意味で、「発達モデル」に対応するような契機には、十分だったとはいえない結果となっている。

V. 討論

(1) 中学校での指導の限界

中学校側やMSとしては、Tが再登校し、無事に卒業させることができれば目標は達成された形になる。その点で一種の工作目标的な目標設定がなされたことになる。また、こうした工作目标の一部に、中学卒業後の生徒の進学を考えて、高校側に「不登校枠」があることから、そうした進学先を決められるようになれば、その役割を十分果たしたといえることができると言えよう。

こうした学校教育制度上の問題として、在学中の期間だけが問題になり、そうした対応が迫られるのであるが、Tのような不登校生徒が、高校で不登校が改善されるか、それとも不登校が継続するかについて情報を手に入れることが必要ではないか。というのは、一人の人間の人生は継続しているのであり、環境が変われば、だれでも不登校はなくなるということではないからである。

近年問題になっている、次の段階への連携の問題、例えば、中高連携の問題のうちにも、こうした問題を含めて情報収集をして継続的な対応をする必要があると考えられる。

(2) 「発達モデル」の視点の問題

SCの対応すべき問題として、前述のように「治療モデル」と「発達モデル」のどちらで対応すべきかという問題がある。それは対象となる生徒たちをどの位の期間で対応するかという問題と関わりがある。現在ある環境に不適應を起こしている場合には、それに対して外的環境を変えるか、それともその生徒の内的環境（心理的な在り方）を変えるかという問題になる。短期的には、外的環境を変えることは難しいので、悩んだりしている生徒の心理的な在り方を変え、再適應させるように図ることが中心になると考えられる。こうした解決の方法は、言ってみれば「治療モデル」に該当する。それに比べて、「発達モデル」は、長期間にわたって、対象になっている生徒が、その外的環境を自発的に自分で乗り越えていく能力の向上（発達）に期待するものである。その場合、外的環境を変えるとか、新しい環境を設定するとかによって、その発達は大いに影響を受けるけれども、そうした周りの外的

環境を、自分の内的環境（心理的な在り方）と対峙させながら、新たな自分を作り上げたり、新たな意味づけを行なって自分を成長させていくような働きかけをすることが「発達モデル」ということになる。こうした視点でみると、工作目标の再登校だけを中心に考えていくことは、その対象の生徒の発達の側面から見て、効果的であったかどうか分からない場合も起こり得る。というのは、その生徒の人生の中で、再登校への働きかけが、場合によっては好ましいとは限らない働きかけだったということもあり得るだろうからである。

本事例では、この生徒の不登校の原因の大きなものは、家庭内の人間関係、特に父親の理想像とT本人の父親の理想像を実現させようとして上手くいかなかったことによるものではないかと思われるが、こうしたことへの解決は、何もなされないまま時間が経過した。しかし、何とか卒業して高校入学が果たせたけれども、T本人は、まだそれらを乗り越えるようにはなっていないままである。

このように、不登校生徒の再登校への働きかけと、「発達モデル」での働きかけとをうまく併用することが必要ではないかと思われる。本事例では、こうした「発達モデル」への働きかけに対しては、学校側も家庭の両親も、全く意識していないように思えてならない。

(3) MSの援助効果について

学校の指導の基本方針について、MSは情報提供できるものの、最終的な決定権はなかったと思われるが、1学期から8月にかけては、T本人が不登校の状態が継続していたために、MSとの信頼関係の構築が優先すべき課題になっていた。その点では、指導方針の決定には関与できなかったものの、MSの役割であるTとのやりとりをする部分は操作要因と考えることができる。本事例では、関係者が集団で対応すべきものであったが、Tの不登校が継続していたために、その解決の突破口をMSに委ねられてしまった形になっている。そうした意味で、Tと家族と直接関わりを持ったMSの役割が大きくなって、再登校へ向かわせるための大きな比重を占めていた。MSの働きかけを見ると、Tの将来や希望についての示唆を与えている点で、「発達モデル」に沿う部分の援助を多少している。しかし、家族の人間関係にまで踏み込んだ問題指摘や解決への糸口などについては一切していない。本来、こうした指摘はT本人や保護者と対話をし、専門的な視点からアドバイスすべきSCや相談センターの専門員による範囲ではなかったかと思われる。本事例では、学校側の指導方針が結局は再登校を目標にしており、

その解決のための手立てを図り実践する形になっている。不登校が学校の条件ばかりでなく、家庭での条件にも大きく左右されることは明白である。Tの将来的な成長を考えた場合、もう少し家庭での条件についての変更を促すアドバイスができなかったかと悔やまれるのである。

(4) 家族関係の情報収集について

Tの家族関係については、MSから得られた情報でしか、Tと両親以外の家族の状況の詳細が得られなかった。Tの不登校によって、父親や母親の心理状態がどう変化していったと予想できるか、姉、妹や弟たちがどのような振る舞いをしたかについては、ほとんど情報が得られていない。MSの役割と立場が、SCや相談センターの専門員とは異なることから、こうした情報を入手できる立場でないことが大きな原因であると思われるが、Tの不登校が、家族の人間関係や家族の雰囲気を変えたことは予想できることであり、それらの情報が得られなかったことは、Tのこれからの心理的な成長を考えると、残念な気がしてならない。母親のヒステリックで感情的な言動が、きっと家族内での混乱を来たしているはずだし、父親のTへの対応の変化も、Tの不登校という現実を父親がうまく処理できないことから発生していると予想できるからである。こうした予想を、家族全員の事実情報が得られ

ば、Tの心理的成長や家族関係の変更や将来の関係の在り方について、もう少し具体的な予想ができたのではないかと考えられる。その点がとても残念である。

(なお、筆者の一人の黒木が在住する市町村と所属先、および不登校生徒とその家族のプライバシーを守ることを念頭において、アルファベット文字にしたことをお断りしておく)

引用文献

- 1) 「自殺の直接的要因は『いじめ』第三者委が報告書提出 大津中2自殺」産経新聞, 2013. 1
- 2) 「不信の連鎖 語って絶つ 大津いじめ事件 第三者委報告(下)」朝日新聞, 2013. 2
- 3) 「体罰教員 6721人に急増『素手で殴る』が最多」産経新聞, 2013. 8
- 4) 「平成24年度 子ども・若者白書」内閣府, 2012. 9
- 5) 杉村省吾「スクールカウンセラー、さらなる活用に向けて」平成12年度 スクールカウンセラー研究連絡会報告書, 兵庫県立教育研修所 心の教育センター, 2001. 2
- 6) 住本吉章「スクールカウンセラーの仕事を考える」平成12年度 スクールカウンセラー研究連絡会報告書, 兵庫県立教育研修所 心の教育センター, 2001. 2

SUMMARY

Kohichi TOGI,
Youko KUROKI:

The Study of the Help Effect to Junior High School Student who Refuse to Go to School (1)

This study aims to ascertain the effect of the help to go to school again from the position of mental supporter to the junior high school student who refuses.

The following results were acquired.

- 1) Mental supporter made a role as the mediator between the school staff and the parents of the student.
- 2) The solution based on “the development model” with the fundamental cure to the student who refuse to go to school have not made any effect.
- 3) Mental supporter could not acquire information about the member and that relationship in the family which influence the student who refuse to go to school.

(K.TOGI ; Uyo Gakuen College

Y.KUROKI ; Mental supporter in junior high school)